小学校高学年における子どもの社会的自立を目指した学級づくり

U17C203G　桑野　まゆら

Ⅰ　問題と目的

筆者はこれまで、学級の児童一人一人が「学校が楽しい」「自分にはよいところがある」と思える学級づくりを意識してきた。在籍校で実施しているアンケートでは、どちらの項目についても決して低い数値とは言えないが、それでもそう感じられない児童はいる。一人でも多くの児童がそう感じられるようにするにはどのような学級づくりを目指していけばよいのかを少しでも明確にしたいと考えた。

不登校に関する実態（平成26年7月　文部科学省）では、学校を休み始めたきっかけで「友人との関係」が大きな割合を占めていることも明らかになっている。このことから、学級の中での児童同士の人間関係をどのように作っていくかを意識していくかも重要であると考えた。

学校生活の中で児童のどのような姿を目指していけがよいのかを考えたとき、平成29年3月に公示された小学校学習指導要領の特別活動編の目標に注目した。

・周りの人の多様性を受け入れ、協働できる人間関係を築くこと。
・自分の所属する集団や生活上の様々な問題を解決し、よりよい生活をつくろうとすること。
・自分にふさわしい生き方を主体的に考えたり、選択したりできるようになること。

この3つが具体的な姿だと捉えた。さらに、このような姿を目指していくことは、最終的に子どもの社会的自立を目指すことにつながることであると考え、そこに向かうために、どのような手立てが有効かを児童の意識や教師の意識をもとに検討していくことを研究の目的とした。

Ⅱ　在籍校における学級づくりの現状と課題

1　在籍校における学級づくりの実態を探る

これまでの筆者の学級づくりを振り返ることに加え、在籍校における学級づくりはどのように行われているかを探る必要があると考え、授業参観やインタビューのもとに学級づくりが行われているが、学年や学校全体で統一したり共通認識されたりしているはずのことについて、ずれがあることが明らかになった。しかし、それまでの筆者の経験や授業参観、インタビューから学級づくりをしていく上で大切になってくる視点が明らかになってきた。それは以下の3つである。

○目標づくりとPDCAサイクルの活用
（→のちに「学級目標実現に向けた取組」に変更）
○規範意識づくり
○関係づくり（担任と児童、児童と児童、担任と保護者）

その後の授業参観から、どの要素を意識して取り組んでいても、他の 2 つの要素との関連が必ずあることが明らかになった。この時点で筆者は、3 つの要素について図1のように捉えた。

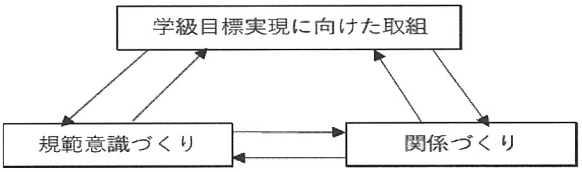

図1　3つの視点の関連性①

2　「学級づくりで大切なこと一覧表」の作成

1で見えてきた 3 つの視点について一つ一つをより具体的にし、一覧表にまとめることとした。これを作成することで、今後様々な学級を担任した際にも、大切にしたいことがぶれずに学級づくりを行っていくことができるのではないかと考えたからである。また、特別活動としての学級づくりで目指していきたい児童の姿へもつながっていくであろうと考えたからである。

作成する際には、筆者が意識してきたこと、在籍校におけるインタビューで意識されていたこと、さらに千葉県総合教育センター「学級づくりハンドブック」や高知県教育委員会「『夢』・『志』を育む学級づくり」などを参考にした。

「学級目標実現に向けた取組」については 6 項目、「規範づくり」については 5 項目、「関係づくり」につい

ては、＜児童と児童＞3 項目、＜担任と児童＞4項目、＜担任と保護者＞3項目、＜担任と同僚＞は3項目で、全24 項目を作成した。

3　在籍校の教員の意識調査とその結果

作成した項目を用い、他の職員は実際どのような意識で学級づくりに取り組んでいるのかを調査した。それぞれの項目について 4 段階評定法で回答してもらうこととした。45 人中 43 人、教職歴 1 年目から 39 年目までの教員から回答を得た。

結果、「学級目標実現に向けた取組」と「関係づくり」において、「大事だと思っているし実践もしている」の数値が低かった項目は以下のようであった。

(1) 学級目標実現に向けた取組

③担任の思いと児童の思いが重なり、目指す方向が明確になっている。

④学級目標実現のために、PDCAサイクルを活用する。

(3) 関係づくり（どちらも担任と児童の関係づくり）

④一人一人とつながるコミュニケーションツールをもっている。

⑤毎日必ず全員に肯定的な声を掛ける。

この結果から、学級目標に児童の思いが十分に吸い上げられていないことや児童と児童の関係づくりの前に担任と児童の関係づくりにも課題があることが見えてきた。教員はどれも大切だと感じてはいるが、具体的な手立てを講じないことや手立てが不十分であることが、「学校が楽しい」や「自分にはよいところがある」と思わない児童の意識とも関係しているのではないかと考えるようになった。

Ⅲ　「学級づくりで大切にしたい３つの視点」を用いた実践

この意識調査の結果を踏まえ、学級づくりについてより有効な手立てを探るために、在籍校のいくつかの学級と実践を行った。

1　アセスから見える児童の意識

意識調査では学級づくりに関する教員の意識を知ることができた。一方で、児童はどのような意識をもっているかも重要であると考えた。どんなに担任がよりよい学級にしようと考え取り組んでいても、児童がそれを感じなければ、よい学級や児童同士のよりよい人間関係とは言えないであろう。そこで、いくつかの学級の担任と実践するにあたって、アセスにおける「教師サポート」と「友人サポート」に注目し、3 つの視点における具体的な手立てを考え実践するとともに、その変化にも注目していくこととした。

2　「資質・力量マップ」における実態把握と実践

一緒に実践を行う学級の実態把握をするために、「学校組織マネジメント研修～すべての教職員のために～（モデルカリキュラム）」（平成 17 年 2 月　文部科学省マネジメント研修カリキュラム等開発会議）における「資質・力量マップ」を活用した。ここでは、一覧表での 24 項目について、学級担任が実際の自分の指導について自己評価を行い、これから強化していきたい部分の具体策を一緒に考えた。中学年 4 学級、高学年 1 学級と行った。ここでは、実践を行った 5 学級の中から、高学年A学級を取り上げる。

＜高学年A学級担任との実践＞

○実践前　この学級の担任はどの項目も比較的高く自己評価をしていた。学級目標実現に向けて、学級目標を決定後、行事などを活用しながら振り返りをさせるなど、意識して取り組んできた。しかし、活動はしているが、児童がもっと自分たちで意識して取り組むにはどうすればよいかと考えると、学級目標からPDCAサイクルをうまく活用していきたいという思いを強く持っていた。

○実践内容　学級目標をもとに付けたい力を具体化した。この際、児童の言葉によるイメージの統一を図ることを重視し、重点的に取り組む力を検討し決定する。さらに、そのために自分ができることがんばることを具体化させ、活動を行い、振り返りと価値づけを行った。これを繰り返し、アセスによる分析を行った。

○実践後　学級目標からつけたい力を児童のイメージで共有していくために多くの時間がかかった。しかし、それが明確であると後期が始まってから 2 月までの間に 4 回のPDCAサイクルを実施することができた。振り返りを行った際には、グループの友達とそれを共有したり、担任がそれを価値づけしたりすることを繰り返した。結果、担任が意図的にゴールを設定したとき以外にも児童が自ら進んで意識して取り組む姿が見られるようになった。また、1 月に行ったアセスでは「友人サポート」について、要支援の割合が明らかに低くなった。PDCAサイクルの活用を意識して取り組んだ実践であったが、結果的に児童同士の人間関係が高まり、規範意識ももつことができるようになった。

3　「学級づくりで大切にしたい3つの視点」についての関係性の変化

2での実践から、図1で考えていた 3 つの視点の関連性について、捉え方が変わった。3 つの視点についてどれも大切であることに変わりはない。しかし、すべてが同等ではないことが明らかになった。図 1 との違いは、「学級目標実現に向けた取組」の中で、「規範意識づくり」と「関係づくり」が行われ、それを繰り返していくことで、人間関係力・問題解決力・自己実現の力がそれぞれ育まれ、自信となって、子ども一人一人の社会的自立へとつながっていくということである。

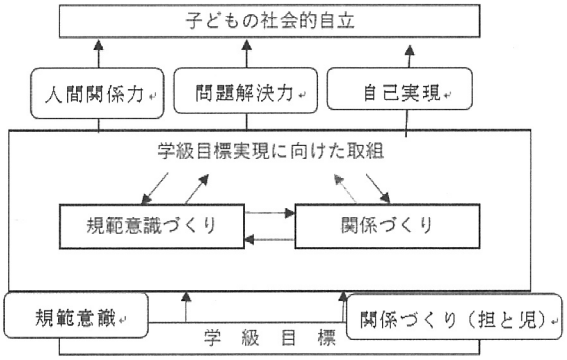

図2　3つの視点の関連性②

Ⅳ　自学級における子どもの社会的自立を目指した学級づくりの実践

在籍校で学級担任に戻り、3 つの視点についての知見をいかしながら、子どもの社会的自立を目指した学級づくりについての実践を行った。

1　学級目標づくりの実際

学級目標づくりは、時間をかけてでも児童同士のイメージをしっかりと共有させることが、その後の取組にも影響してくるであろうと考えた。イメージが共有できていれば、学級でいろいろな問題が起こった時にも、学級目標が必ず立ち返れるものになるはずだからである。

実際に学級目標を決める場面では、児童一人一人に理由や根拠も考えながら自分の思いや考えを必ず持たせること、またそれを必ず全員が伝える場面を作り、何度も話し合い、確認しあうことを意識した。同じ姿をイメージしていたはずが、いくつかの過程を経て、何度も話し合う中でそれが異なっていることに気が付いていた。児童は同じイメージをもとうと、友達への伝え方を変えてみたり、友達の伝えたいことに質問を重ねたりしながら理解しようとする姿が見られた。最終段階で学級目標「笑顔のあさがお」の掲示物を作る中で、アドバイスし合う姿から「自分たちが考え、作った学級目標」という意識をもつ姿を確認することができた。

2　学級目標をいかした関係づくりの実際

実際には、学級目標をもとに付けたい力を考えさせたところ 5 つの力に決まった。5 つの力は、「元気に過ごす力」「協力する力」「全力で取り組む力」「一人一人の個性を出す力」「相手のことを考える力」である。その中から、その時、重点的に取り組みたい力とそのための具体的な方法とゴールを設定し、個人としてのめあても立てた。

表1　変化を見ていく項目

(7)	いやなことがあったとき，友だちは慰めたり励ましたりしてくれる。
(14)	「いいね」「すごいね」と言ってくれる友だちがいる。
(24)	元気がないとき、友だちはすぐに気づいて、声をかけてくれる。
(29)	友だちは、わたしのことをわかってくれている。
(33)	相手の気持ちになって考えたり行動する。
(35)	みんなの前で自分の考えや意見を言うことは好きである。
(36)	ペアやグループで、自分の考えや意見を言うことが好きである。

取組の中で、児童の意識を知るためにアセスの中で児童と児童の関係についての意識をはかれる項目(7)(14)(24)(29)(33)をピックアップし、その変化を見ていくこととした。さらに、5 つの力に関連する項目(35)(36)を加え、その変化を見ていくことにした(表1)。

<u>○取組1</u>

1回目の取組では、「相手のことを考える力」を伸ばすために、学級の仲間のよかったところをカードに書くという活動を行った。回収箱を設置し、毎日、日直が入っていたカードを読み、すべて教室に掲示することとした。期間は1か月。これを決めていく中で、児童がイメージを共有しにくい場面では、担任が言葉を補いながら明確にしていった。例えば、カードの記入について、「相手のことを考える力」が付いたかどうかを考えには、自分のしたことに対して友達がどう受け止めたのかという視点で書くということでイメージを統一してから取り組んだ。

振り返りカードからは、相手のことを考えて行動すると相手にもその気持ちがつたわること、この活動をきっかけに自分が積極的にいろいろな友達にかかわれるようになったことなどが読み取れた。自分たちが考え

た方法を通して、どういう言動が相手にとってうれしいことなのかを知ったり、当たり前だと思っていた言動を認めてもらったり、自分から積極的にかかわろうとすることができるようになったと児童自身が実感していた。

表２　表１で示した平均値の比較①

項目	7	14	24	29	33	35	36
１回目	4.1	4.4	3.8	4.2	3.8	3.1	3.6
２回目	4.3	4.7	4.0	4.4	4.4	3.3	4.0
差	+0.2	+0.3	+0.2	+0.2	+0.4	+0.2	+0.4

表2は、取組前と後の表１で示した項目の平均値の比較である。どの項目についても平均値が上がった。相手のことを考えることを意識的に取り組んだことで、以前よりも相手のことを考えた言動が多くなっただけでなく、33 以外の項目も上がったことから、これまでのお互いの言動を意識してみても、相手のことを考えていることがたくさんあることに気が付き、お互いの安心感がうまれてきていることがわかる。

○取組2

２回目の取組では、「一人一人の個性を出す力」を伸ばすことになった。１回目で、「相手のことを考える力」は付いてきたと思う分、学級の仲間がまだ自分を出し切れていない、つまり一人一人の個性を出し切れていないのではないかと考えていた児童が多くいた。そこで、「会社を作り、みんなの個性を出せるようなイベントや活動をそれぞれの会社が企画していく」ということになった。この取組の中でも、児童がイメージを共有しにくい場面があった。会社の内容とメンバーについて、楽しいことと「一人一人の個性を出す力」を伸ばすために行うのでは取り組み方が異なってくるという考えを児童同士で確認し合い、取り組んだ。

振り返りシートからは、友達のことをよく知るきっかけになったこと、まだ出し切れていない人もいるからもっといろいろな取組をしてみたいと思ったことなどが読み取れた。

表３　表１で示した平均値の比較②

項目	7	14	24	29	33	35	36
２回目	4.3	4.7	4.0	4.4	4.4	3.3	4.0
３回目	4.1	4.7	3.9	4.1	4.1	3.3	4.1
差	-0.2	0	-0.2	-0.3	-0.3	0	+0.1

表３は取組前と後の表１で示した項目の平均値の変化である。前回の取組後と比べると全体に平均値が下がった。これは、この活動が友達の個性は何かと児童同士が追究するというよりは、お互いの個性を出しやすくなるためにはどのようなことをすればよいかと考えていたからではないかと捉えている。14 の平均値などから、活動する中で友達に認められる場面や雰囲気がそのまま継続できていることもわかった。「周りの多様性を受け入れる」ことができるようになった姿が定着してきたと言える。

これらの取組を通して、担任がきっかけを作り、児童自身が人と関わっていこうとする思いや意欲をもてるようにすることが大切であると言える。そして、学級目標をいかすことで、児童は目標やゴールに向かって自分から学級の友達と関わっていこうとする意欲をもつことができるようになる。

ここでは２つの取組を取り上げたが、１年を通して他の力についても同様の取組を続けた。

Ⅴ　子どもの社会的自立を目指して大切にしていきたいこと

これまでの実践を通して、担任の思いだけでなく児童の思いをいかに大切にしていくかということ、学級全体でイメージを共有していくことが大切であることを改めて実感した。学級目標をいかしながら、イメージしているなりたい姿を常に共有していくことで、友達とどのような関係を作っていけばよいのか、自分たちによりよい生活を作るにはどのようにすればよいのかというようなことを考えることができるようになるのだとわかった。

きっかけは、担任の働き掛けや意図的な PDCA サイクルの活用であるが、それを繰り返していくことで、そうではない場面でも、友達とのかかわりを大切にしながら、児童が主体的に自分たちで考えたり解決したり行動したりするようになっていった。また、関連すると捉えてきた規範意識づくりについても、目標やゴールが明確であれば、どのようなルールが必要かを児童が自分たちで考え、試し、うまくいかなければまた考えるという姿が見られるようになった。これらのことを積み重ねていくことが、冒頭に述べた特別活動編の目標で捉えた姿が人間関係力・問題解決力・自己実現する力となり、子どもの社会的自立へとつながっていくことになる。これらのことから、今後も学級目標をいかした関係づくりについて様々な実践を通して考えていきたい。